

## 【展示報告】

### 神奈川大学みなとみらいキャンパスの大学史展示について

大坪 潤子

#### はじめに

神奈川大学資料編纂室（以下、編纂室）では、業務の一環として神奈川大学史に関わる展示を行ってきた。展示は、年史や紀要などの刊行物や講義などと共に、大学のあゆみを伝える有効で重要な方法である。

展示の場所は、横浜キャンパス三号館展示ホールにおける「創立者・神奈川大学史展示室」（二〇一四年三月～、現在リニューアル準備中）がメインとなっているが、湘南ひらつかキャンパスでも小規模ながら一号館一階において「神奈川大学史展示コーナー」を設け（二〇一七年三月リニューアル、二〇二三年三月撤収予定）、それぞれ神奈川大学の創立者や歴史を知るための常設展示とし、横浜キャンパスでは随時特集展示なども開催してきた。

二〇二一（令和三）年四月、横浜のみなとみらい地区に神奈川大学みなとみらいキャンパスが新設された。本稿は、このみなとみらいキャンパスにおける大学史展示の制作報告である。

#### 一、展示スペースの選定

みなとみらいキャンパスには大学史の展示スペースが予め具体的に確保されておらず、展示位置や内容は未定のまま竣工を迎えた。

このため編纂室では、キャンパス竣工後、みなとみらい統括部統括管理課と調整しつつキャンパス内に大学史展示が可能かつ相応しいスペースを求めて、複数個所を比較検討することとなった。主な候補は一階の米田吉盛記念ホール前の壁面二面、同ホールの階段後方外側、四階の米田吉盛記念講堂外（出入口脇）であ

る。記念ホール前の空間は安全上展示ケースや立体物を置くことが難しかったが、壁面としては十分な面積があり壁面展示としての利用が可能なこと、さらに、ソーシャルコモンズとして設定された空間の一面として地域一般にも開放されること、建物の外からでもガラス壁を通して展示空間が見えること、そして、学内外のホール利用者の道線上にあり自然と目にふれることからここが最も相応しいと判断し、関係各所の承認を得た。こうして展示スペースが決定したことで、展示コンセプトに基づく内容検討に進むことになった。

## 二、展示のコンセプトとデザイン

まず、キャンパスの立地と展示スペースの特徴をコンセプトとして意識した上で、展示内容を検討した。

みなとみらいキャンパスはみなとみらい地区（横浜市の西区と中区にまたがり、横浜港に面する再開発エリア）において初めて設置された大学施設で、近隣には多くの企業ビルや商業施設などが立ち並んでいる。横浜キャンパスにも湘南ひらつかキャンパスにもない特徴である。開設時は新型コロナウイルス感染症対策として入構制限があったものの、一階部分はカフェな

どを含むオープンスペースとして設計されている。また、ここに設置の学部はグローバル教育に力を入れた経営学部、外国語学部、国際日本学部であり、留学生や国際的なイベントが多いことが想定された。

こうしたことから、みなとみらいキャンパスでの展示は横浜、特にみなとみらい地区の歴史にも触れながら、神奈川大学の学生や教職員はもちろんのこと、近隣の企業に勤務する人々や観光客、また、学会やシンポジウムなどに参加する国内外の来校者にも関心をもってもらうことに留意した。ただし本展示は「展示ホール」や「博物館」などといった空間に位置しておらず、展示を目的としての、あるいは「展示」であることを意識しての来場者はあまり想定できない。おそらく展示を目にするのは、記念ホールの利用者（学内外）、一階（ソーシャルコモンズ）の利用者（学内外）、キャンパス外の通行者であり、いずれも初めは「意図せず」に展示を目にすることが考えられる（写真4）。そしてこの「意図せず」とも目にするからこそが、このスペースで展示することの最大の特徴と考えた。他の目的で近くまで来て展示が目に入った場合や、授業の合間、学会の休憩時間など、短時間であっても何か

一つは神奈川大学の歴史について知り興味の入口となる可能性がある。そのための「きつかけとしての展示」を心がけることとした。

また、展示パネルなどを吊るためのピクチャーレールが壁面の天井近くに設置されていたものの、同壁面には消火設備の扉があることから、その使用の妨げとならないよう、吊り展示はせず壁面全体にグラフィックシート（シール出力、ラミネート加工）を貼ることとした。部分的に立体展示を取り込む提案もあったが、予算や清掃の問題から見送り、完全に平面（シール出力、ラミネート加工）の展示とした。

これらの条件を踏まえ、二〇二二年七月初旬に仕様書を作成し、三社によるデザイン案と見積提出の上、グラフィックデザインと施工の業務委託先を決定した。

また、横浜キャンパスでは展示の造作で大学のシンボルカラーである「ブラウドブルー」を、湘南ひらつかキャンパスでは水色とオレンジ色を基調としているが、みなとみらいキャンパスの内装はアースカラーの落ち着いた色調となっているため、ここに違和感なく溶け込み、かつ埋没しない色調のデザイン、という難しい注文を出した。キャンパスの学生たちとそう変わ

らない歳の担当デザイナーの当初の提案には、カフェ風の空間デザインや街角風のデザインなどがあり、それぞれ、デザインによって展示空間の雰囲気が大きく変わることを改めて感じるものであった。一方で、壁面装飾ではなくあくまで壁面「展示」であるため、示すべき情報が多く、これに適したデザインとする必要があった。編纂室内でも意見を出し合いつつ、時間軸としてブラウドブルーの帯を水平に設け、上下に大学や地域の歴史を出来事ごとに配置する年表風の展示とした。また、壁面の高さ（四・五メートル）を活かし、天井に近い部分には横浜専門学校を含む横浜の鳥観図やみなとみらい地区を臨む近年の航空写真などを拡大して配置することとした。また、向かい合う壁面に挟まれた突き当たりのガラス壁面越しには、二〇二三年三月に幕を閉じる湘南ひらつかキャンパスからその記憶を引き継ぐために移植されたシンボリックな木が見えるため、視線をそちらに伸ばすことも計算した。

具体的な展示の構成と進行については次に述べる。

### 三、展示の構成と進行

展示の基本デザインは前述のとおりだが、さらに、

「米田吉盛記念ホール」のホワイエともいえる空間でもありながらここに「米田吉盛」についての解説がなかったことから、展示の冒頭（ホールのドア付近）で神奈川大学と米田吉盛の関係および建学の精神を説明し、米田吉盛略年譜を配した。そしてホール側（進行上、A面とした）を「創立者米田吉盛と横浜専門学校」（写真1・3）、その向かい側の面（同B面）を「神奈川大学のあゆみ」（写真2）とした。大きく分けて、A面が創立者および横浜専門学校時代（一九二八～一九四八）、B面が大学昇格後の神奈川大学時代（一九四九～）となる。B面の後半には「世界へ、そして未来へ」の公式コピーを小タイトルとして世界地図に神奈川大学の協定校をドットで落とし込み、国際交流の広がりを視覚的に示した。これは横浜キャンパス八号館の「マップホール」にある世界地図（モザイク壁画）のリフレインにもなっている。

A・B壁面それぞれに、神奈川大学史として画期となる移転や学部開設などの事項を時系列で記し、次にそれぞれの時期における学生の諸相を窺える学校行事や課外活動などの写真、さらに社会一般の大きな出来事と、横浜市の出来事を背景として記した。特にB面

では、都心臨海部総合整備計画の愛称として「みなとみらい21」決定（一九八一年）、横浜博覧会開催（一九八九年）など、みなとみらい地区についても特に入れ込んだ。

いずれも、短時間で読めるように解説は最低限のものとし、詳しく知りたい場合は創立90周年記念誌『神奈川大学90年のあゆみ』（神奈川大学、二〇一九年十月）の電子ブック版をスマートフォンで読めるよう、壁面にQRコードを示した。また、使用した写真や資料は、建築、交通、祭り、スポーツといったテーマ毎にギャラリートークを展開できるように選んでいる。

なお、日本語を母語としない利用者を想定して、全ての事項や文章は英文併記とした。これは多言語とする案もあったが、デザイン上あまりに複雑になることから日本語と英語のみとなった。とはいえ従来、他の二キャンパスでの展示はコーナータイトルを英文併記する程度であったので、写真のキャプションを含め全て、というのは予想以上に困難であった。単純そうなのところでも、例えば「横浜市電」は路面電車であったが、路面電車をtramとするかstreetcarとするか、といった判断をはじめ、歴史的背景を含めての翻訳は特



に慎重を期するため、翻訳を依頼した国際センター職員やご助言いただいた外国語学部の方から多くの教示を得つつメールの往復を繰り返した。本質的に、編纂室の用意した日本語原稿に主述が曖昧で翻訳しづらい部分があり、これは今後を活かすべき大きな反省点であった。一方、本展示に限らず大学として定めた重要な語句の英訳について、新たに検討が必要となった。

本件は当初二〇二一年九月下旬を工期としていたが、英訳の最終的な確認などを改めて時間を十分にとって行うこととなり、施工日は、米田吉盛記念ホールがオンライン授業をキャンパスで受講する場合の教室に設定されていたことなどから日程が限られ、最終的には、年度末も押し迫った二〇二二年三月十三日、十四日の施工となった。これは神奈川県を含む十八都県で新型コロナウイルスの「まん延等重点措置」が適用中という時期で、施工完了から一週間後の三月二十一日に全都県で措置が解除となっている。本件は制作の準備段階から常に感染状況を睨みつつの作業であった。

## おわりに

二〇二二年十二月現在、三号館展示ホール内の展示

のリニューアル（神奈川県立日本常民文化研究所と同時進行）に向け、編纂室では準備作業の真只中である。リニューアル準備の中で、展示ホール開設（二〇一四年三月）までの経緯を参照することが容易でなく、当時の担当者の記憶に頼るにも限界があった。特に当初の展示計画やその後の変更の過程は、後からその意図を正確に辿るのは難しいことを痛感した。

みなとみらいキャンパスにおける大学史展示も、準備期間が短かったことや新型コロナウイルス感染拡大中で在宅勤務などイレギュラーな状況下で進めたこともあり、十分に経緯を記録化していたとは言い難い。ここで振り返っておくことでこの記録・報告が将来少しでも役に立つことを願う。また、編纂室は横浜キャンパスにあるため、この展示が日常的にどのような受け止められているか肌で感じることが出来ないが、みなとみらいキャンパスの中でその役割を果たせれば幸いである。

最後に、展示制作にあたって画像利用に特別なご配慮をいただいた国際日本文化研究センター、画像提供を受けた神奈川県立日本常民文化研究所、広報部広報

課、協定校の情報や年表・キャプションの翻訳をお願いした神奈川大学国際センター、導入文の翻訳にアドバイスをくださった外国語学部の方、そして度重なる変更に応じていただいた株式会社フジヤの担当者様、制約の多い中で美しく仕上げてくださった施工担当の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。



(写真1) 展示壁面A「創立者米田吉盛と横浜専門学校」



(写真2) 展示面B「神奈川大学のあゆみ」

【展示報告】 神奈川大学みなとみらいキャンパスの大学史展示について



(写真3) 展示壁面A (部分)



(写真4) キャンパスエントランス方向